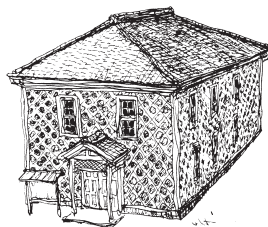


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、ディベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。
三田演説館は、1875（明治8）年に開館した日本最初の演説会堂です。

●常任理事

おびしんのすけ
小尾晋之介

プランBで行こう

自分の思い描いていた未来予想図とは異なる現実と直面して「こんなはずではなかったのに」と思うことは長い人生のなかで何度もあります。そういう場面でどんな行動を取るか、時と場合と対処する問題によりさまざまな選択肢があるでしょう。状況が好転するまで待つか、すぐに「プランB」にとりかかるか。また、切り替える判断をいつするか。とにかく、悲嘆に明け暮れていては何も解決しません。時は進む一方です。

春先に世界中で大混乱に陥れた新型コロナウイルス感染症の拡大は、その勢いが緩やかになりはしてもなかなか収まる気配がありません。教育の場への影響は今後も長く続くことが予想されます。慶應義塾大学では学生と教職員が一体となった取り組みで、今年度春学期のほとんどすべての授業がオンラインで配信され、学びの機会を何とか確保することができました。

学内の調査によれば、オンラインで行う授業には教室で行うものとは別の教育効果が認められました。例えば、画面で講師の話聞きながら受講生同士がチャットを使って意見交換をす

ることで、教室の講師と受講生という単純な関係を超えた知の交流が生まれました。「プランB」が単なる代替にとどまらず、新たな価値を生み出す可能性を感じさせます。オンライン授業は、秋学期以降、キャンパスを徐々に開放しながらも活用してゆく予定です。

大学が用意する各種の国際プログラムも大きな見直しを強いられました。在学中に交換留学を予定していた人たちには、学修計画の根本的な見直しが求められることとなりました。世界中で国際教育に携わる専門家たちは、義塾の協定校も含め、人の移動を伴わない新たなプログラムを模索しています。このような試みは海外への渡航が前提となっていた国際学術交流の考え方を大きく変えていく可能性もあります。

現在の状況は、これまで当たり前のように考えてきた前提を見直し、落ち着いて考える機会と捉えることができます。気持ちを切り替えて、新たな一步を踏み出すときが訪れたとも言えるのではないのでしょうか。